

# 本の芸術品 武井武雄「刊本作品」

一般的に「美術」というと、皆さん、どんなものを想像しますか？ 絵画、彫刻、工芸、版画、写真等々。それぞれ、さまざまなジャンルを想像されたことでしょう。

では美術と言われて「本」と連想された方はいらっしゃるでしょうか？ 「美術＝本？」と不思議に思うことなかれ。そんな本があるのです。

装幀などの外装のみならず、一冊の本の全部を総合して作品と考え、絵・話・装幀・函、印刷方法のすべてにおいてこだわりを持って作られた本の芸術品．．．本の宝石とも呼ばれる、武井武雄の「刊本作品」です。

武井武雄はそれまで童話の添え物として軽視されがちだった子供向けの絵を「童画」と命名、芸術にまで高めました。また、童画の他にも版画、童話の制作やイルフ（＝古いの逆、つまり新しい）トイスと呼ばれる玩具の創作に取り組むなど児童文化史を語るうえで欠くことのできない存在です。

その武井がライフワークとして、約半世紀にわたって139の作品を制作、しかも、一作ごとに素材・技法を変え、およそ100種類の印刷様式を用

いて制作したものが刊本作品です。

武井は言っています。「なぜ一体こんな具合に一冊毎に表現様式を変えることに憂き身をやつしているのか、ということマンネリズムを防ぐ事がそのひとつ、（中略）何よりも大切な事は今までの本常識の中で一度も考えられなかった素材を広汎にとり入れて、本というものの固定観念を破り、動脈硬化を防いで本感覚を新鮮にしていく事こそ本の美術への新しい道と考えるからである」と。まさに刊本作品にこそ、常に新しい芸術を探究し続けた武井武雄をかいま見ることができるのではないのでしょうか。

ところで、刊本作品は1作品の制作数が原則として300部に限定され、手にすることができたのは「親類」と呼ばれる「刊本作品友の会」会員だけでした。そのため幻の美書とも言われています。

この秋の文学館の特別展では「親類」だった永井路子氏旧蔵の刊本作品を一挙公開します。めったに目にするのできない「本の芸術品」。武井武雄の真髄にふれていただければ幸いです。（特別展「武井武雄『刊本作品』の世界」は10/22（金）から11/23（火）まで開催）



武井武雄「刊本作品」と  
刊本作品専用本箱「本の城」